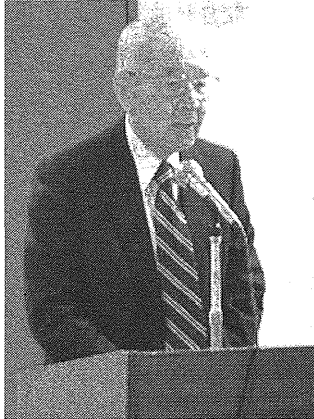


## 三石辰雄先生を偲ぶ会

### 伊藤 俊夫

私は二期生、いうなれば次男坊の伊藤です。三石先輩は長男ですので帝王学を会得され、学



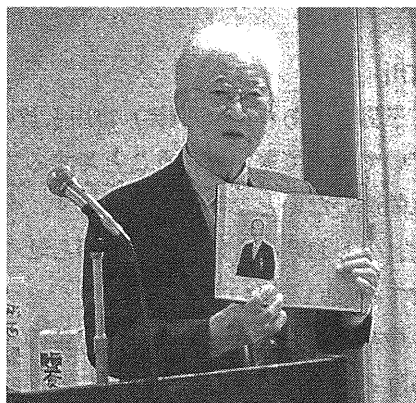
生時代から親身になって、後輩の面倒をみてくださり、また、母校の充実・発展のために大活躍でした。それにひきかえ次男坊は、兄貴が使ったお古、生まれ故郷では「お下がり」といいますが、新品渴望下での日々でしたから、存在を忘れられないよう承認欲求が駆動して、悪戯ばかり。次男坊がそうですと、三男坊は孝行息子になります。（笑）本日はこの真実の実証を兼ねて、三男が三石先輩と研究会のこれまでとこれからを話してくれます。最高の適任者である吉川さんのお話を伺いながら、三石先輩を偲び、その業績をたたえとともに、研究会のさらなる発展を誓いあいしたいと思います。

### 吉川 弘

三男坊であります。（笑）吉川と言います。三男坊も長男、そして次男の方のお下がりをお願いして育ってきたということですので、長男、次男の方々の影響の下に育ってきたということは間違いないところがございます。今日は第一部で三石先輩を偲ぶという主旨がございますので、少しお時間をいただいて語らせていただきたいと思いますし、この会のことについても触れてみたいと思います。

最初に長男であります三石先輩のことについてであります。去年のこの会に三石先輩が来られる予定だったんです。ところが、一向にお姿が見えないので手打教授がお宅のほうに連絡を取られたところ、入院したというようなお話でした。それではもう入院中じゃお見えにならないだろうということで、会が進められました。2、3日後に私がお宅のほうに電話をしたら、西武池袋線の沿線に練馬高野台という駅があります。その駅から見えるところ、歩いて5分ぐらいのところですけども、順天堂の練馬病院がございます。かなりの方がお見舞いに行かれたということでご存知だと思うのですが、それで早速行ってみたわけですが、そうしましたら、その時は非常にお元気で、普通に会話もできる状態であったんです。入院されたのは、たまたまお宅で夜起きられて、手洗いに立たれたんだと思いますが、夜のことで薄明かりの中で、なにかに躓いて倒れられて、頭を打ったんだというようなことでした。それで入院ですね。救急車で入院したということでございまして、いま申しましたように、まだまだ入院

されて間もなくの頃は十分会話もできまして、いろんな世間話をいたしましたし、この会のことについても「当日はどうだったかね」というように、いろんなことをお話いたしました。しばらく経ちましてお宅のほうに電話をしたら、どうも一向に退院の許可が出ない、長引きそうだとするので、私も何回か順天堂大の練馬病院のほうに行ってみました。何回か行くうちに、ちょっと前から肺のあたりに病気がありまして、ちょっとその手当もあって長引いているので、一向に退院できないと。だんだんそのうちに、喉から栄養を摂る、というようなことになりまして、もうそうなると言葉が出ない、喉のほうからですから。治療のために、のどを開いたということもありますので、食事はもう流動物だけということになり、食べられなくなりました。だんだんそうなりますと、やはりどうしても体力が衰えてきました。それから10月に伺いました。亡くなられるちょうど前の日に、やっぱり呼び寄せられたのでしょうか。私は学生の頃に先輩たちに連れられて、吉原通いじゃないですけど、吉原見物をしたのです。(笑) その帰りに電車がなくなってしまって、三石さんが下宿をしておられたところに転がりこんで、それ以来ずっと、私に言わせると弟のように可愛いがってくださって、卒業した後もいろいろお世話になってきたものですから、そんな関係もあって、亡くなる直前に呼び寄せられたのではないかと思います。その翌日に亡くなられました。私は納棺の時にもご家族の方とご一緒させていただいたのですが、非常に穏やかなお顔で最後を遂げられました。きっともう思い残すことはなかったのではないかと、そういうようなことを感じました。非常に穏やかなご表情でおられました。さて、このご著書についてです。ちょうど1年ぐらい前でしょうか。三石さんは名刀を持っておられまして、工藤祐定でしたか、備前長船の名刀を持っておられました。それは義理のお父様から譲られたという、そういう名刀を持っておられました。私も刀を少し扱うものですから、「お前、刀の手入れに来てくれないか」というので、時折行っていたのです。その頃に、この本の話が出まして、「実は今こういう本を書いているんだよ」と、いわゆる自分史ですね。そして、お怪我をされる前の去年の暮れに、刀の手入れと併せてお宅に伺った時に、「いよいよ原稿が出来たんだよ」、「こういうふうなものになるんだ」と言って、構成を見せていただきました。その時にですね、「始めに何か、写真が欲しいですね」と言いますと、「うーん、考えていたんだけどどうしようかな」ということで、この本の最初のページにありますように、この写真です。「先輩、叙勲の時



の写真を出されたらどうでしょうか」というようなことを申し上げたら、早速出版社に手配をされたのでしょう。そんなやりとりもあって、この冊子が出来上がったのです。そういうことでは、それも含めて何も思い残すところなく、穏やかな顔でお旅立ちになったというような事でございます。以上は、三石先輩の最期についてのご報告です。偲ぶ会ということですから、そういう趣旨から申し上げた次第であります。

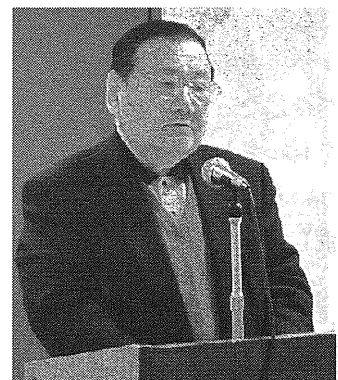
ちょっと長くなって恐縮ですが、この会のそもそものについて、今、伊藤先輩がこの会のいきさつと言いますか、流れについてもと、ご挨拶の中にありましたし、それから手打さんのお話の中にも、同じ研究室のつながりが今も続いているということを申されました。ですから、この会のいきさつについて、私の知っている限りで申し上げ、若い会員の方に承知していただきたいと思えます。できるだけ簡単にとします。私は三期生ですが、一期生の方からずっと何期生ぐらいまででしょうか、お世話になった教授の先生が平沢薫先生でした。その平沢先生は、非常に学生をかわいがってくださいます、お正月になると「家に来ないか」といって、学生をみんな家に呼んで下さいました。私が卒業したのは1955年、日本の年号でいいますと、昭和30年でございます。その時は、かなり食糧事情はよくなっていたのですけれども、飲み物などビールはありましたが、日本酒はまだ清酒というのはなかったですね。アルコールを混ぜた合成酒です。そういうのは深酔いすると翌日は頭が痛くて起き上がれないというような合成酒です。ところが、平沢先生のお宅に行くとき清酒が飲めるんですね。(笑) ビール、清酒、それからいろんな肴も用意されていました。根津神社のすぐ前にお宅がありました。そうするうちに、だんだん在學生も増えてきたので、人数の関係で部屋が狭くなって、神田の駅の近くの料亭に行くようになりました。入江たか子さんという女優さんをご存じでしょうか。ご存じの方はもうここには少ないと思えますけれどもね。入江たか子さんが来るということで、そういう美人が来るんだぞと先生から聞かされまして、「じゃあ場合によっては会えるかもしれませんね」なんて言いながら行ったものです。こうして神田駅の近くの料亭で新年会が開かれるようになったのです。それからさらに人数が増えましたし、平沢先生も退職をされまして名誉教授にられました。後任には辻先生が就かれました。辻先生はご存じの方が多いと思えます。辻先生が研究室の主任になられたわけですが、その頃ちょうど茗溪会館、この会館ではなくて古い会館のほうですが、人数も増えたことですし、新年会をそちらでやろう、というようなことになったのです。その前に、もう一ついきさつがありました。金沢大学に行かれた古野さんですが、古野さんは一期生で三石さんと同期の方ですが、助手になられたんです。古野さんが世話役になって、この会がもたれてもいたのです。古野さんはその他にも、マスコミ研究会などをもっておられて、市川さんはマスコミ研究会のほうも関わりが深かったと思うのですが、そういう方々も参加するようになって、たいへん賑やかになってきた、というようなことになりました。

戻りまして、辻先生の時の茗溪会館の会は、研究会というよりも、その頃はいわば懇親会でしたが、開くようになった訳です。その懇親会がずっと続いて、それからこの名溪会館が新し

くできて、こちらの部屋が人数的にもちょうど良からうということになりました。辻先生が主任になられた頃に、山本恒夫さんが助教授として埼玉大から異動されて引き継がれました。その後、辻先生が退官され、山本さんが教授になり、そして手打さんが研究室に助教授で入られて、今度は手打さんのお世話できたわけですが、やがて山本恒夫さんが退官されて、そして手打さんが主任になりました。その後、この会を持つに当たっては懇親会だけでは・・・ということで研究会というような、若干研究的な味わいを持たせようではないかというようなことになって、前半が設けられました。今日は三石さんを偲ぶ会ということですから研究会はないのですが、研究会を開くようになって、その後に懇親会をとなりました。その懇親会ですが、ちょうど私は1955年の卒業ですので、もうゆうに半世紀を超えるわけですね。ですから本当に、こんなに長く続いている会、同じ研究室の会合というのは、私の知る限りでは少なくとも筑波大学の研究室にはないんじゃないかと思います。場合によっては他の学類にも恐らくないんじゃないかな。医学部あたりではあるかもしれませんが。いずれにしても、そういうことで非常に伝統がある。先ほど言いましたように研究会ですから、前半は研究、とくに卒論を書かれた方、院生では研究論文を書かれた方、修論を書かれた方、そういう方が発表して、それを我々は聞いてきました。その前に、主任の方から研究室また大学全体の動向などを伺って、自分の母校のことは楽しみですから、そういうお話やそれから卒業をする方、大学を終えられる方がそれぞれの論文について研究発表する。それに我々は意地悪をする、そして大いにいじめるというようなことをやりました。(笑) 私たちは逆にいじめながらも、「なるほど、今の研究はこういう方向に行っているのか」というようなことを学びながら、その後懇親会で楽しむという、そういう流れであります。先ほど申しましたように半世紀以上も続いている会でありますので、ぜひこの会が続いて欲しいということと、私などはもうそろそろ来られなくなる年が、間もなく来るのかもしれないと思いますが、できるだけ来たいと思っておりますし、勉強させていただきたい。そんな意味も込めて、ぜひこの会をさらに発展させていただければ大変ありがたく思います。長々としゃべらせていただきましたけれども、・・・せいぜい5分くらいですね(笑)、終わります。

## 市川 昌

四男ですか。市川昌と申します。名簿でいうと、三番目のところに書いてございます。先ほどお話に名前が出てきた平沢薫という先生がおられました。その方が社会教育の講座をやっておられました。平沢先生というのは、実は当時高等師範と文理大と東京農業専門学校が合併して東京教育大学になりまして、教育大学の中でも、駒場の農業専門学校から来られた先生です。それから、もう一つ先生はブラジル生まれだったと思います。どちらかという、私たち教育大学の中の



諸先生方とは違った、ブラジル的というか、国際的な肌合いといいますか、そういうのを持っておられたんですね。教育大学というのは、皆さんはどういうイメージをお持ちか分かりませんが、例えば私は、大学出てからすぐジャーナリズムの世界に入りまして、最初は読売新聞に行きまして、その後NHKに行ったのですが、外から見ますと、教育大学というのは割合にまじめで、一生懸命やる。それから出てきた学生は非常に実力があり、文献研究が得意で、着実に仕事はやる。だけど逆に、残念ながら、外の人から言うとやや視野といいますか、物の考え方が少し狭い。それから、人付き合いというか、特に小さくまとまってしまって、教育関係で小さくまとまって、そして他の世界、教育以外の世界、そういう他の世界に出ていったときに、どうしてもその幅が狭いというふうに関外の方から思われていました。私は平沢さんのところに、お正月の日に飲みに行くわけですが……。私は後に教員になったのですが、どういうわけか、学生さんを飲ますだけの力がなくて、恥ずかしいんですけども。(笑)当時の先生方は、なぜかお正月になるとみんなで行ってたくさん飲ませてもらいました。あのゆとりはどうしていたのかなと思うぐらいです。立派でなかなかのものでした。それから、平沢先生には非常にきれいなお嬢さんがおられました。ミス日本みたいにきれいな人です。抜群にきれいだったですね。学生としてはそういう楽しみもありましたね。先ほど申しましたように、平沢先生はそういうふうに関、いままでの教育大学のタイプとちょっと違ってました。非常に国際的だったのです。今こうやってみますと、私は日本人ですけども、日本人以外に、例えば中国の方、それからタイですか。私はユネスコの仕事をずっとやっていたから、異文化に強く、バンコクもユネスコのアジア本部で仕事をして、よく知っています。そういうことで、僕はどちらかというところ、国際的な社会教育活動の拡がりという影響を非常に受けました。

もう一つお話しておきたいのは、三石先輩の最後に残された本は、自分の単なる自叙伝ではなくて、日本のちょうど戦後の混迷期、日本が戦前から戦後にかけて急速に、これまでのどちらかというところ軍国主義的な狭い日本から一気に変わっていく。その時に、先生が生まれた長野県の教育も急激に変わっていきます。その変わっていく中で、青年学校それから青年学級というものは、大きな役割を果たしました。とくに農村青年にとって、非常に力を持ったのです。その話を非常に体験的に、先輩ご自身が、ただ学校制度がいまのように、小学校、中学校、高校、大学というようなストレートな歩みではなくて、農村青年として働きながら学ぶという複数の道がありました。三石先輩は青年学校そして青年学級、それから教育大学にお入りになって、東京都庁に入られた。そういう人生を送られた、その辺のところ非常によく書かれています。その間に、三石先輩の青年学校時代の先生で非常に優秀な方がおられて、「三石、おまえは高等師範に行け」ということを言うんですね。そのあたりが、私は強く印象に残っております。実は、昨年日本生涯教育学会で、慶応大学の大学院のある女性の方が、まだ20代の方ですけど、長野県の信濃教育会のことと、そこにおける青年学校の意味というのを克明に調べまして、研究発表しました。その中にこの長野の青年学校の話が出てくる。その教師が何人かの優秀な学生を高等教育の世界に導いていくという、そしてその後帰ってきて農村改革をやる

ということを書いているのです。そこで彼女と話をしている、実は僕の先輩にこういう人がいるんだよと話したら、彼女はとても喜んでいました。ですから、僕は三石先輩の歩んでこられた道というのは、戦後日本の中で大きな意味があると思っています。我々は、とにかく日本は急激に高度経済成長で豊かになってしまったものですから、日本の働きながら学ぶという教育制度がほとんど顧みられなくなってしまったのですね。やっぱりこの本を読みながら、改めて日本におけるそういうことを三石先輩は言おうとしていたんじゃないかなあというふうに思いました。それから、長くならないようにしますが、私自身も今年で79歳です。来年80になります。三石先輩も非常に長生きされて、そしてがんばって、いつもいいお話をなさってくださいました。私も先輩に学んで一生懸命やっているのですけれども、その時にふっと思うことは高齢者の問題です。私自身がだんだん時代とともに高齢化していくわけですけれども、日本においても、やはり高齢者がどういうふうな生きがいを持って、そしてどういう学習をしていくかということがとても大事だと思っています。それはどこがやるのか、どうしたらいいのかということですね。とにかく高齢者の問題は、国会の審議なんかを見ていると、政治家の方々は口を揃えて言うのが福祉、医療の対象という形で高齢者を考えているのです。しかし私は、高齢者の問題を福祉、医療というような考えでいたら、日本の財政はあと30年も持たない。そうではない、高齢者というのはある意味で第二の労働資源であり、あるいは優秀な知的資源であると考えています。さらに健康な高齢者は、かなりのパーセンテージで増えてきています。ですから、そういう中で、従来の考え方と違った捉え方があってもいい。先ほどの青年学級の話で言いますと、昔は働く若い青年たちの中から新しい知的資源を見出そうとしたのが三石先輩の時代です。今の世代は逆に、高齢化の中から、もう一度この新しい可能性というものを探してほしいと思います。このことを今日、若い方たちにぜひお願いしたいなと思うことです。これは日本のみならず、東アジアもみんなそうなんですね。韓国も同じですし、それから中国においても一人っ子政策の関係で、これから高齢化の問題は大きな問題になります。これからの新しい国づくりのなかで、どういうふうに社会教育が貢献していくのか、そういうことを考えることが大事だと思います。

最後に、僕が三石先輩から学んだ一番大事なことを言います。三石先輩は人事が上手なんです。ここにいらっしゃる野澤さんは、元市長さんでしたけれども、人というのはポジション、職場におけるポジションを得てはじめて力を発揮するという部分があります。これは別に、僕は偉くなれということを書いてはいるわけではなくて、やはり一つのポジションを人に与えることによって、その人は伸びていく。ですから、だんだん年齢が高くなってくると、私も三石先輩から学んで、大学に行ってから、特に学部長をしたときに考えたことですが、なんとか自分たちの後輩を、そのしかるべきポジションに推薦していくということがとても大事だと思います。私の場合は、三石先輩とこちらにおられる文部省におられた伊藤先輩にも大変お世話になりました。今日、ジャーナリストから大学の研究者になれたというのは、両先輩の大きな力があつたことを忘れることはできません。ともかく、僕は先輩が残してくれた方向性を、

人格的にも素晴らしい方でしたが、一つの新しい時代への方向性ということ、僕らはもう一度考えてみる必要があるのかなと思っております。どうもありがとうございました。

## 野澤 久人

私は十男ですから、今までのお話で尽きているという感じもして、いろんな話をしなくてもよいかというふうに思いますが、ただお世話になったこと、とくに具体的にというよりも、精神的な意味でいろんな影響を頂いたということについて、若干、先生のお話をしておきたいと思えます。それから個人的にも、先生はそう思っていらっしゃらなかったかと思えますけれども、お世話になりましたので、その辺りの話を少しさせていただきます。



まず、私自身は長野県の上伊那郡の辰野町というところの生まれです。先生は長野県の下伊那郡の喬木村という村の生まれです。飯田からちょっと入ったところですから、中央高速で行きますと、諏訪がありまして、それから、その次に伊北というインターがあるんです。私のところは伊北というインターで降ります。その後に伊那があつて、駒ヶ根があつて、飯田と行くわけですけども、その飯田からちょっと入ったところ、今人口 6,000 人くらいの村だと思います。まだ村でやってるんですよね、頑張つて。それは、先生の影響もいろいろ村民の人たちにはあるのではないかと思います。そんなご縁もありました。ただ、十数歳ちょっと差がございますが。

私はちょうど終戦の年に小学校の一年に入りました。したがって、8月15日に終戦になって、その後、炭で教科書を塗るわけですよ。炭塗りの教科書を使って勉強しました。なぜかという、今までと、まったく前のこととは切り替わった形で新しい勉強が始まる。新しい考え方がそこに入れられて、それによって、教育をしていくんだという形に変わりましたから。ところが三石先生は、それ以前の教育を知ってるんです。私たちは少なくとも、近現代史というものもを全く教わることなく大きくなりました。ところが、三石先生は恐らくそのところをきっちり勉強をされて、あるいは家庭のなかでそういうことを教わって、もちろん戦争の話なんかいっぱい聞いているはずなんです、そういうなかで育てこられた、というところに私はだいぶ大きな違いがあるような気がします。先日も地元にいる専修大学の先生とお話ししたら、彼は五日市憲法を見つけた先生ですけども、その先生のお話では、今の学生は少なくとも近現代史を全く知らない者が結構いる、大勢いるということでした。そんな話をしているうちに、私自身はもう少し別な感じの視点で見ますと、日本の儒教の思想で、智とか仁とかというような考え方がありますが、そういったものと、それからもう一つ、武士道のなかで、新渡戸稲造がアメリカで「武士道」を明治時代に書いた、その「武士道」のなかでいわれているような日本の精神みたいなもの、それはある意味で、東洋思想といったらいいのかもしれない。

もう一方では、戦争に敗れたために西洋の思想を勉強させられたわれわれとの間に、断層みたいなものがものすごく大きくあるんだなというような感じがしている。そういったことをいろんな形で、これから日本史も高校で必修になるようですから結構なことですが、先生からいろんな部分で、いろんなことを教わってきているということが一つです。

それから個人的な面で言いますと、私は一番お世話になったのがこの中の方では、吉川先生なんです。仲人をやっていただきましたから。(笑) 実は、私が入った次の年に妻が学校給食の栄養士として福生にきたわけですけども、福島出身なんですけど、たまたまそこで一緒になって、一緒になれよというようなことになりました。ただ、一緒に仕事するのが嫌だったんですよ。どうしても嫌だ、と言っていたら、東京都の栄養士の採用試験があるという話で。学校給食があるところに全部都の栄養士をおくんだっていうのは、三石さんが考え始めたという話なんですよ。それで、その試験がありまして、それではお願いしますとなりました。そしたら、成績はどうだったのかわかりませんが、東京都の職員になっちゃったんです。これはもう結婚するしかないわけですよ。(笑) それで吉川さんをお願いをして、仲人をさせていただいて、当時仲間内に、社会教育主事で大学から来ている者が大勢いたものですから、彼らが全部会費制でやってくれた結婚式をやりました。そういう具合に、いろんな意味で、いろんな形で、私たちのことを気にかけてくれて、世話をして面倒を見てくれました。ひとつの例として、こんな話をさせていただきました。そんなことを含めて、私はこの研究室の良さは、今、手打先生や上田先生が頑張ってください、この会をやって下さっているということも含めて、第一回の卒業生の三石さん、私は十回目ですから、えらく下の方なんです。その間に大勢いらっしゃいます。ただ、その間に亡くなった奥田先生だとか、いろいろいらっしゃって、そういう方々の思いを引き継ぎながら、いくらかでも役に立てるようになることができれば、というような思いがしております。ただ、うまく下に繋がっているのかどうかということになると、私は、その後の方々が、なかなかうまくつながってきているかどうかよくわかりませんが。たまたま、今年は手打先生、上田先生が学部の学生を連れて福生に来てくれたものですから、酒だけはいっぱい飲んで帰って頂きましたけれども、(笑) 中身は意味があったのかどうか、その辺がよくわかりません。いずれにしましても、いろんなことをしながら、お互いつながりあって、困ったときには先生方に一言いうと、うまくいろいろやってくださるはずだと、それは三石先生の教えが伝わっているからだ、こんなふうに考えながら、われわれ頑張っていければというふうに思っています。いずれにしましても、三石先生のご冥福をお祈りしたいと思います。どうもありがとうございました。